

## 善い種(行い)は、 善い華(結果)を開く

九月とはいえ暑い日が続いていますね。この暑さに負けないくらいの熱い気持ちで今月も元気に過ごしていきましょう！

いま多くの人が、豊かさの中で幸せを実感できずに生きています。それは自分の行為に対してそれ相応の、あるいはそれ以上の見返りを期待し、求める人が多いからではないでしょうか。

ここで私の拙い人生を引き合いに出すのは恐縮ですが、私の人生を振り返ってみると、自分の目的に対して行った努力の何分の一かでも成果が得られるならば上々で、いくら努力をしても、思う様な成果も手にすることが出来ない事が多くありました。実はそれが自然の姿だと思えます。私達は欲多き故に、皆が物理的に不可能な望みを持ち、それが叶えられないイライ

しょうかん

ラと、焦燥感が世の全体に募っている様に思えます。そうではなくて、見返りばかり求めず、努力すること。その行為自体に何らかの意義を見出せるようになれば、世の中はもつと穏やかになるのではないのでしょうか？

今をさかのぼること約120年前、1890年に、和歌山県沖で難破したトルコの軍艦のお話を知る機会がありました。

この物語は、損得勘定のソレではなくて、言葉の壁を越えた人間として、どう生きなければいけないのか？という事を改めて考えさせられる実話であります。

トルコの軍人さんが流れ着いた時、近くの「大島」という島の住民は、流れ着いた68人の乗組員たちを、自らの貧しい生

かえりみ

活も顧みず、自分たちの大切な食べ物まで提供して、親身にお世話をしました。この事態を聞かれた明治天皇は、医師団を派遣して遭難者に手厚い看護をし

た上で、2隻の軍艦を派遣してトルコまで送り返してあげたというのです。

決して見返りを求めないこの行動には、後日談があります。

それから95年後の1985年にイランとイラクが戦争を始めた時であります。

イラクは、「これから48時間以降、イラク上空を飛ぶ飛行機は全て撃ち落とす」と宣言しました。

世界各国はすぐに同国にいる自国民の引き揚げを完了しましたが、日本だけ対応が遅れ、250数人の日本人が取り残されました。そのとき飛行機を派遣し、

残された日本人を日本まで送り返してくれた人達がおりました。それがトルコ人でした。それはかつての大島の住民に対する恩返しだったというのです。

世の中を良くする為には、たとえ自分に何の見返りがなくても、善き行いを積み重ねて世の中に善の循環をもたらすことが大切だという教訓です。

しかし、たとえ善い行いを重ね、お釈迦様のような生き方をして

いても、無難な人生が送れるとは限りません。人生には試練がつきものであり、むしろお釈迦様のような生き方をしようとする程、より多くの試練が襲ってくるものなのです。そんな時はつい「私も何も悪いことしてないのに、私だけどうしてこんな目に遭わなければならぬのか」と愚痴をこぼしたくなるものです。

しかし、本当の幸せを手に入れたのであれば、起きたこととは受け入れ、自分の努力で状況を変えていくよう、努めていく以外にありません。

辛い出来事に会ったとき、愚痴をこぼして周りまで暗く

するのではなく、憂いを自分の胸の奥に叩き込んで周囲の人には悟られないような生き方が出来るよう、努力していききたいものです。